

マツハによれば「要素」は物理的なものと心理的なものに對して「中立的」なもので、その結合の仕方によつて物理的なものと心理的なものの相異が出てくるのだから、かかる「要素」からすべてを説明する哲學は觀念論と唯物論の「一面性」を克服したものだといふのである。しかし乍らその「要素」とは感覺に外ならぬから、マツハ哲學の本質は、「存在することは知覺されてゐることだ」といふバークレー流の主觀的觀念論である。經驗批判論者アヴェナリウスも「自我と環境との不可分的同格」の主張によつて「一面性」を免れたものと自ら考へてゐる。だが彼にあつても、この不可分的又は「原理的同格」の故に、主觀から獨立な客觀的實在は否定され、存在は結局感覺と見做されるから、彼の哲學とマツハ哲學との同一性は全く明白である。マツハ主義、經驗批判論は、吾々の認識は感覺から始まるといふ心理學的事實から出發して、感覺をその原因たる外界の刺戟物＝客觀的實

在から切り離し、絶對視し、窮局の「要素」と見做し、従つて外界の存在を何處かへ押し退け、否定し、かくて、普通に外界の客觀と見做されるところのものを感覺の複合體として、即ち意識にとつて内在的なものとして説明することから生れるものである。だからレニンはマツハやアヴェナリウスの哲學の本質が古くはバークレーの主觀的觀念論、近くはシュツペやレームケの内在哲學と異らないことを強調してゐる。

ボグダーノフの經驗一元論もマツハ主義と同じく「要素」(即ち感覺)が一切のものの基礎であるといふ命題を固執する。彼によれば、先づ「要素」の渾沌があり、次に「人々の心理的經驗」が生じ、この心理的經驗から「人々の物理的經驗」が抽出、「派生」され、最後にそこから「意識」が発生する(註)。だから「物理的世界」は吾々から獨立なものでなく、「物理的世界とは、社會的に同意され、社會的に調和された、一言でいへば——社會的に組織された經驗である」(註)。従つて、人間から獨立な客觀的眞理はなく、眞理とは多數者の意見の一致といふことに外ならない。このやうな觀念論的見地からみれば、社



會的存在と社會的意識も同一であつて、前者が後者を規定するのでないことは勿論である。

(註一) 「唯物論と經驗批判論」岩波文庫版中卷一一八―一九頁参照

(註二) 同上卷 一九五頁

### (b) 模寫論

かやうな觀念論的反動と徹底的に闘ふに當つては、物質と精神、存在と思惟、客觀と主觀、等々といふやうな、哲學の根本問題の吟味から始め、「思想や感覺から物に進む」觀念論に對して「物から感覺や思想に進む」唯物論の主張を展開することが必要であつた。レーニンはその場合、プレハーノフがやつたやうに、單にマツハ主義の内的な論理的矛盾の暴露によつて唯物論に對するその非難の不成立を明かにし、それによつて唯物論一般を擁護したばかりでなく、辯證法的唯物論の根本的な理論的内容の詳細な積極的展開を通して、觀念論の決定的な克服を遂行した。

ところで觀念論に對する成功的な闘争は、徹底的な模寫論なしには不可能である。レーニンは、人間の意識から獨立な物質世界の存在を認め、「感覺はただ一定の仕方で組織された物質における一定の過程とのみ結びついてゐる」こと、それは高度に發展した物質の一特質であるといふことを主張するにとどまらないで、「意識は總じて存在を反映する」といふ模寫論を強調し、認識は存在の記號、象形文字だ杯といふ不可知論的認識論を批判しなければならなかつた。意識は客觀的存在を模寫、反映するのでなく、單に存在についての記號を持つにすぎないとするならば、存在と意識は切り離され、存在は主觀的な記號たる感覺とその複合體の世界の背後に埋没し、その在るがままの姿では認識されない、即ち不可知なものとして吾々の前から消え去り、吾々の認識によつて把握される世界は實は吾々自身の感覺とその複合體に外ならぬ、といふ主觀的觀念論が結論されることになる。かかる不可知論的見解こそマツハ主義の出發點であり、それ故にマツハ主義は新ヒューム主義とも呼ばれたものである。かやうにして模寫論の展開が唯物論の擁護、觀念論の克服



のために絶対に必要な課題として提起された。

だが徹底的な模寫論は辯證法的な模寫論でなければならない。舊唯物論の缺陷は「模寫論に、認識の過程と發展に證辯法を適用し得ないことである」(註)とレーニンは云つてゐる。従前の唯物論者は、認識を辯證法的に、その發展においてとらへることが出来なかつた。認識の發展を正しく説明することが出来なかつた。これがために、自然認識の飛躍的發展の時代には、それは破綻を示し、マツハ主義の如きものにとつて代はられた。だからマツハ主義と闘ふレーニンは、正に辯證法的な模寫論を展開し、それによつて舊唯物論並びにマツハ主義的觀念論の認識論の一面を克服しなければならなかつた。

(註)「辯證法の問題に寄せて」

吾々は先きに辯證法と結合した模寫論がマルクス、エンゲルスにおいて確立され、すでにレーニン以前に、認識の源泉、その眞理性の規準としての實踐、客觀的、絶對的眞理の

近似的模寫としての認識の相對的眞理性、の問題が取扱はれ、唯物辯證法的に解決されたことを見た。レーニンの功績は、マルクス、エンゲルスによつて確立された模寫論を、觀念論的認識論、不可知論との論争において、エンゲルス以後の科學の達成に結びつけて、詳細に、具體的に、全面的に發展させたことである。で、レーニンは、吾々から獨立な客觀的實在としての「物自體」は不可知で、吾々の認識し得るのはただ現象のみであるといふカントの不可知論に對するエンゲルスの反駁——産業の發展と共に「物自體」は「吾々に對する物」に、認識されたものに轉化するといふ辯證法的模寫論——と述べた後、そこから「三つの重要な認識論的結論」を導き出す。即ち——

〔1〕 物は吾々の意識から獨立に、吾々の感覺から獨立に、吾々の外に存在する。

(2) 現象と物自體の間には決定的に何らの原理的差異もないし、あり得ない。差別は單に、認識されたものと、未だ認識されてゐないものとの間のそれである。で、兩者間の特殊な境界に關する哲學的考案、物自體は現象の『彼岸』にある(カン



ト)とか、又はあれこれの部分については未だ認識されてゐないが吾々の外に存在はしてゐるところの世界に關する問題は何らかの哲學的仕切りによつて隔離され得るし、また隔離されなければならぬ(ヒューム)とかいふことに關する哲學的考案——これらすべては空虚なタワゴトであり、氣まぐれであり、ごまかしであり、虚構である。

(3) 認識論においては、他のすべての科學領域におけると同様に、辯證法的に考察すべきである、即ち吾々の認識を完成的な不變なものと假定しないで、如何にして無知識から知識があらはれ、如何にして不完全な、不正確な知識がより完全な、より正確なものとなるかを吟味すべきである。

一度諸君が無知識からの人間の知識の發展といふ見地に立つならば、諸君は……單に科學と技術の歴史からのみでなく、また萬人の日常生活からの何百萬の觀察が、人間に次の事を示してゐるのを見るだらう。即ち、『物自體』は『吾々に對する物』に轉化し、吾々

の感覺器官が外部のあれこれの對象からの刺戟を経験するときには『現象』が發生し、——あれこれの障害物が、吾々にとつてその存在が知られてゐる對象の吾々の感覺器官に對する働きかけの可能性を除去するときには『現象』が消滅するといふことを(註)。

(註) 「唯物論と經驗批判論」岩波文庫版上巻 一六二—一六三頁

右の引用文においては、辯證法を適用された模寫論に關する思想が十分に明確に提起され、客觀的實在の模寫としての認識は、一回限りで完結するものとしてでなく、過程として、物を益々正確に、益々深刻に反映してゆく過程として「科學と技術の歴史」の見地から考察すべきだといふ、後に「哲學ノート」において隨所で強調された思想はすでにここで十分に成熟した形で表白されてゐる。

更にレーニンは認識のかかる發展においてその推動力が實踐であり、實踐こそ眞理性の規準であるといふ、マルクスの「フォイエエルバッハに關するテーゼ」やエンゲルスの「空



想より科學へ」の英語版序文に表白された諸命題を吟味したのち、それを要約して、「かくて、唯物論的理論が、思考による對象の模寫の理論が、ここに完全な明白さをもつて敘述されてゐる。即ち、吾々の外部に物が存在する。吾々の知覺や表象は物の模像である。これらの模像の檢證、眞なるものと誤れるものの區分は實踐によつて與へられる」と書いてゐる(註二)。人間の有限な能力をもつて爲される實踐は、決して一度に絶對的眞理を完全に與へるのではなく、實踐そのものは技術、産業の發展につれて歴史的に發展し、益々力を増し、益々深刻になるものである。だからレーニンは「生活、實踐の見地が認識論の第一の、基本的な見地でなければならぬ。そしてこの見地は教授的スコラ學の無際限な考案を闕の外に放り出して、不可避的に唯物論に導く」と主張しながらも、「もちろん、その際、實踐の規準は事態の本質上如何なる人間の表象をも、決して完全に確證又は反駁し得るものではないといふことを忘れてはならない」と云ひ足してゐる。「この規準もまた、人間の知識が『絶對者』に轉化することを許さない程度に『不確定的』なものであるが、同時

に、觀念論および不可知論のあらゆる變種と容赦なき闘争を行ふ程度には確定的なものである」(註二)。

(註一) 「唯物論と經驗批判論」岩波文庫版上卷一七三頁

(註二) 同中卷 二二頁

### (c) 眞理論

相對的眞理と絶對的眞理の關係の問題は、認識を形而上學的に固定的なものとしてでなく、またマツハ主義的に人間による經驗の組織の過程(客觀的實在とは無關係な)としてでなく、人間の意識による客觀世界の模寫の精密化の過程として考察するときに、云ひかへれば辯證法的模寫論の見地から考察するときに、初めて正しく解決される。辯證法的唯物論の模寫論は、認識を過程として捉へない形而上學的唯物論の模寫論や、認識を「物自体」から獨立な過程として考察し、それを單なる人間的主觀の產物、構成として把握する



主觀的觀念論の構成説の一面性を克服するものである。形而上學的唯物論は認識の發展を説明し得ず、マツハ主義は吾々の認識が客觀的眞理の大なり小なり近似的な模寫であるといふ意味で相對的眞理であり、従つて相對的眞理は絕對的眞理と不可分で、後者の要素を含有し、それは人間の有限な、制限された意識の枠の中に反映した客觀的、絕對的眞理であるといふことを理解し得ず、客觀的眞理を否定して、相對論に陥つた。相對論は眞理の客觀的規準の否定に外ならず、種々の理論や學説の對立の中にあつて、何れの理論、學説が最も正しいかを判別する上に役立つ客觀的規準の否定に外ならない。このやうな見地からは科學の進歩を、自然、外界に關する認識の深化の過程、客觀的眞理への接近の過程として理解することも、自己の學説の正しさに關する確信を持つことも出来ない。

レーニンは、エンゲルスと全く一致して、相對的眞理と絕對的眞理の關係の辯證法的模寫論的理解を詳細に展開してゐるが、それは就中次のやうな命題において見事に定式付けられてゐる。「人間の思惟はその本性上、相對的眞理の總和から生成される絕對的眞理

を吾々に與へる能力があるし、また與へてゐる。科學の發展におけるあらゆる段階は絕對的眞理といふこの總和を作るべく新しい粒を附け加へてゆく、だが各々の科學的命題の眞理の限界は相對的であつて、知識の一層の生長によつて時には擴げられ、時には縮められるのである」。「現代唯物論、即ちマルクス主義の見地からみれば、客觀的、絕對的眞理への吾々の知識の近迫の限界は歴史的に制約されてゐる、だがこの眞理の存在は無制約的であり、吾々がそれに近接するといふことは無制約的である。畫像の輪廓は歴史的に制約されてゐるが、この畫像が客觀的に存在するモデルを模寫するものだといふことは無制約的である。……一言で云へば、あらゆるイデオロギーは歴史的に制約されてゐる、だが、あらゆる科學的イデオロギーには（例へば宗教的それと異つて）客觀的眞理、絕對的自然が照應するといふことは無制約である」註。これが、辯證法的模寫論における眞理の問題、認識の發展の問題、一切の認識の相對性と絕對的眞理との關係、認識の歴史的被制約性と客觀的妥當性の問題の解決である。吾々の認識の相對性と絕對的眞理とは、互ひに矛盾す



るものとして、だが矛盾において統一を形成するものとして、對立物の統一として理解され、そして眞理の規準としての實踐によるこの矛盾の不斷の解決と、より高い段階上での新たな矛盾の不斷の發生とが認識發展の發條であり、推動力である。

(註) 「唯物論と經驗批判論」岩波文庫版中卷一〇—一一頁

レーニンは、吾々の認識の相對的眞理性に關する主張としての相對論は、唯物辯證法に包括される一契機であること、だがそれを絶對視し、「認識論の根底」に置くときには、「絶對的懷疑論、不可知論、詭辯論又は主觀主義」に陥るものだといふことを強調する。認識の相對的眞理性の主張としての相對論は、詭辯論や主觀主義に陥らないためには、辯證法的模寫論に包含される契機として理解されなければならない。「辯證法は、すでにヘーゲルが闡明したやうに、相對論、否定、懷疑論の契機を自らの中に包含する、だが相對論に還元されるのではない。マルクスとエンゲルスの唯物辯證法は無制約的に相對論を自

らの中に包含する、然しそれに還元されはしない、即ちそれは吾々のすべての知識の相對性を客觀的眞理の否定といふ意味で認めるのでなく、この眞理への吾々の知識の近迫の限界の歴史的被制約性といふ意味で認めるのである」(註一)。かやうにして認識の辯證法の契機としての相對論の意義が、相對的眞理と絶對的眞理の關係の問題の取扱に當つて解明され、不可知論や主觀主義は認識發展の一契機の一面的固執、絶對化に立脚するものだといふことが明かにされる。レーニンは後に、「哲學的觀念論は粗雑な、單純な、形而上學的な唯物論の見地からみれば謬言にすぎない。反對に、辯證法的唯物論の見地からみれば哲學的觀念論は認識の特徴、側面、限界面の一つを物質や自然から切り離された神化された絶對者へと、一面的に、誇張的に、逸脫的に發展(膨張、擴大)させたものである」(註二)と書いたが、觀念論の認識論的根據に關するかかる理解はすでにマツハ主義との闘争において、その相對論の批判において仕上げられてゐたものである。

(註一) 「唯物論と經驗批判論」岩波文庫版中卷一四頁



(d) 空間・時間・因果性・物質

すでに明かなやうに、人間の認識は矛盾、對立物の統一の見地から考察され、その發展は絶對的、客觀的眞理と相對的眞理との間の矛盾(吾々の認識は客觀的眞理の反映であるが、この反映は相對的眞理以上のものでなく、つねに客觀的眞理に合致しない誤謬の契機をも含むといふ矛盾)を推動力とし、この矛盾の、實踐による不斷の暴露、解決と不斷の再生産を推動力とするものとして、辯證法的に把握される。このやうにして、對立物の統一の法則の見地が吾々の一切の認識(相對的眞理)と吾々から獨立な、その絶對的なモデルとしての客觀的眞理、客觀的實在との間の關係の模寫論的な理解に適用されたものが、とりも直さず辯證法的唯物論の認識論だといふことが分る。レーニンはかかる認識論の見地から空間と時間、因果性、物質等の問題をも取扱ひ、これらのものの客觀的絶對的存在

と、これらのものに關する表象の歴史的に可變的な相對的な性質との關係を、對立物の統一の法則によつて理解することの必要を強調した。

彼にとつては、「世界には運動する物質以外の何ものもなく、そして運動する物質は空間および時間において以外には運動し得ない」といふ命題から、更に進んで次の如く主張することが必要であつた。「空間および時間に關する人間の表象は相對的である、だがこれらの相對的表象から絶對的眞理は生成する。これらの相對的表象は發展しつつ、絶對的眞理の方向を辿つて進み、それに接近する。空間と時間についての人間の表象の可變性は、物質の構造や運動形態に關する科學的知識の可變性が外界の客觀的實在を覆へさないのと同様に、空間と時間の客觀的實在を覆へすものではない」(註一)。或はまた因果性についても、「原因と結果といふ人間の概念はつねに自然現象の客觀的聯關を若干單純化するもので、ただ近似的にのみそれを反映し、一つの唯一的な世界過程のあれこれの側面を人爲的に孤立せしめるものである」(註三)と述べて、自然の客觀的聯關とその反映としての人間の



因果性の表象の相對性、歴史的被制約性とを區別し得ることの重要さを説いてゐる。最後に、物質については、レーニンは、「物質とは、人間に彼の感覺において與へられ、吾々の感覺から獨立に存在しつつ、それによつて模寫され、映寫され、反映せしめられるところの客觀的實在を言ひ表はすための哲學的範疇である」<sup>(註三)</sup>とか、「哲學的唯物論がそれを認めることに結びついてゐるところの、物質の唯一の『性質』は、客觀的實在であり、吾々の意識の外に存在する、といふ性質である」<sup>(註四)</sup>といふ命題を強調して、哲學的唯物論で云ふ物質、即ち客觀的、絶對的に存在してゐる物質と、かかる物質に關する吾々の歴史的に變遷する表象、物質構造に關する可變的な物理學的理論とを、同じく對立物の統一として、その統一において、同時にまた差別において捉へることの重要性を強調した。

(註一) 「唯物論と經驗批判論」岩波文庫版中卷七一頁

(註二) 同 四二頁

(註三) 同 上卷二〇三頁

(註四) 同下卷二〇頁

もちろん、客觀的實在としての空間、時間、因果性、物質と、これらのものについての人間の表象との間の關係は、絶對的、客觀的眞理と相對的眞理との間の關係の特殊な場合に外ならないから、それらのものとその表象との關係についてレーニンが述べたことは、何ら新しい原理の提起を意味しない。しかし乍ら、この種の問題に彼が特に立ち入り、これを解明したことは、觀念論との鬭争、唯物論の擁護の上に重要な貢獻をなすものである。何故なら正に空間、時間、因果性の概念の相對性、物質に關する科學的概念の可變性といふことに囚はれて、相對的な、可變的な吾々の概念の源泉としての客觀的な、絶對的に存在する空間、時間、因果性、物質を否定するのがマツハ主義的觀念論だからである。この點でマツハ主義は、時間、空間、因果性の先天性(即ち絶對的な固定不變性)を主張するカント哲學と同じに、結局においてこれらのものを主觀の範圍に移してしまふものである。



かかる見解に對して唯物論を擁護するためには、相對的、可變的な時空表象、因果概念、物質表象を、客觀的に存在する時空、因果性、物質から區別し、兩者間の辯證法的聯關を明かにすることが必要であつた。そしてそれは對立物としての客觀的眞理と相對的眞理との矛盾的統一といふ見地から初めて明かにされた。

(e) 自然科學批判その他

同時に、レーニンは右のやうな問題の處理によつて、主義時代の物理學の危機の問題の解決の鍵を與へた。元來、マツハ主義はエンゲルスの晩年にすでに萌してゐた物理學の危機の中から生れたものであつた。それは物理學における數學的方法の勝利と、物質構造の理論の目醒ましい進歩（メンデレーエフの元素周期律から元素の崩壞、放射能物質の發見、電子論まで）とのためについた混亂の産物であつた。あらゆる物理的現象が數學的に定式付けられるといふ事實から、法則、因果性は「要素」の系列の單純化的な記載のため吾々が便宜的に設定する「函數關係」であるとか、かかる「函數關係」が認識のすべて

であつて「物質は消滅した」杯と結論すること、および古い物質表象の破綻、物質觀の變革といふ事實から認識の相對性を絶對視し、變化する物質表象を前にして客觀的に存在する物質を忘れ、無視し、否定すること、——これが十九世紀末以來の自然科學の異常な進歩から生れた混亂である。このやうな「物理學的」觀念論が正にマツハ主義の自然科學的地盤であつた。

レーニンは、數理物理學の發展の結果、「微分方程式で表示される形式的關係」に物理的現象が解消されたかの如く考へられ始めた、といふレイの言葉を引用して、「これが『物理學的』觀念論の第一の原因である。この反動的な傾向は科學の進歩そのものによつて生み出される。自然科學の大なる成功は、即ちその運動法則が數學的に仕上げられるやうな同質的な單純な物質要素への接近は、數學者による物質の忘却を生み出してゐる」と云ひ、次に第二の原因として相對論をあげる。「『物理學的』觀念論を生んだもう一つの原因は、相對論の原理、吾々の知識の相對性の原理である。この原理は、古い理論の急激な崩壞の



時代には特別な力をもつて物理學者に迫るものであり、また——辯證法を知らないならば、——不可避免的に觀念論に導くものである」(註)。

(註) 「唯物論と經驗批判論」岩波文庫版下巻八八―八九頁

ここにあげた「物理學的」觀念論の第一の原因——物質の忘却——は實は模寫論の忘却に外ならず、第二の原因——認識の相對性の原理の一面的固執——は辯證法の無理解に外ならない。だから物理學の危機の產物たる「物理學的」觀念論に立脚するマツハ主義を克服するためには、物理學の状態の分析にまで立ち入つて辯證法的模寫論を具體的に展開し、空間、時間、因果性、物質等に關する物理學的知識とこれらのもの自體との關係を正しく解明することが必要となつたのである。

自然科学の危機の分析の結果、レーニンは、物理學の發展が形而上學的唯物論の破綻を示してゐるにかかはらず、物理學者が辯證法的唯物論を知らないために、彼等の一部が觀

念論に逸脱してゐることを指摘する。同時に、彼は物理學において唯物論的傳統を固執してゐる學派(リュツカー、ヘルツ、ボルツマン等)と、マツハ、ポアンカレ、ピアソンの如き「物理學的」觀念論の學派の、二つの方向を區別し、觀念論的方向の矛盾を別抉しつつも、「物理學的」觀念論の決定的克服のためには辯證法的唯物論を知らなければならぬといふことを強調する。何故なら自然科学の進歩は形而上學的唯物論を破綻せしめ、自生的に辯證法的唯物論に向つて進んでゐるからである。「現代物理學は産褥についてゐる。それは辯證法的唯物論を生みつつある」とレーニンは結論する。

彼はまた特に詳細に物質觀の變革を取扱ひ、この問題を辯證法的模寫論の見地から究明して、「原子が破壊されうることに、それが汲み盡せないものであること、物質およびその運動の一切の形態が可變的であることは、辯證法的唯物論の支柱であつた」と云ひ、物の「本質」とか「實體」とかいふものも相對的で、客觀に關する人間の認識の深化の段階を表現するものに外ならず、「そして昨日はこの深化が原子より先きに進まず、今日は電子



やエーテルより先きに進まないとするれば、辯證法的唯物論は、人間の進歩する科學による自然の認識のこれらすべての道標が、一時的、相對的、近似的な性質のものであることを主張する」と結論してゐる。(註)これは、後に「哲學ノート」において述べられてゐる思想、論理學の範疇、認識の範疇は客觀に關する人間の認識の契機でありまたその深化の段階である、といふ思想の端初をなすものである。

(註) 「唯物論と經驗批判論」岩波文庫版下卷二二頁

「唯物論と經驗批判論」においては、なほ模寫論の展開の不可缺な一環として、人間の認識過程とその生理學的基礎たる感官および神経系統との關係、心理的なものと生理的なものの關係の問題が隨所で取扱はれてゐる。これらの問題の科學的究明は心理||神經科學の課題であり、模寫論と密接な關係にあるものである。特に模寫論を反駁するために構成された現代の各種の觀念論的心理學やJ・ミューラー以來の「生理學的」觀念論を克服す

るためには、「唯物論と經驗批判論」で述べられた思想を、最新の科學——例へばパヴロフの反射學、神経生理學の如き——の達成に照し合はせて一層發展させる事が必要である。また「唯物論と經驗批判論」の最後の章では、すでに述べたやうに、哲學の黨派性に關する命題が語られ、史的唯物論の原則的問題が論究されてゐる。

しかし乍ら、レーニンのこの勞作において最も特徴なものは、當時の自然科學の狀態の分析にまで具體化されて全面的に展開された辯證法的模寫論である、即ち認識論である。認識論の究明がそこで必要となつたのは、一言でいへば、觀念論と唯物論の論争は人間の認識の源泉の問題、認識は主觀そのものから起るか、それとも物質世界から來るかといふ問題、云ひかへれば思惟と存在の關係の問題から出發するものだといふ理由によるのである。だから、觀念論に對してよりも、むしろ形而上學的唯物論に對して最も激しく闘はなければならなかつたマルクス、エンゲルスと異つて、觀念論的反動と全力的に闘はなければならなかつたレーニンは、當然に認識論の問題を全面的に取り上げた。その場合、形而



上學的唯物論と成功的に闘ふにも辯證法的觀念論では駄目で、やはり辯證法的唯物論が必要なのと同様に、觀念論、特に形而上學的唯物論の破綻の中から生れた觀念論を打破するには正に辯證法的な唯物論が必要であつた。これが、「唯物論と經驗批判論」において、單に唯物論的認識論でなく、唯物辯證法的認識論、辯證法的模寫論が全幅的に展開された所以である。

### 第三節 マツハ主義批判の意義と教訓

#### (a) 理論的意義

レーニンによるマツハ主義の批判は辯證法的唯物論を新段階に押しやつた。それは認識論への辯證法の適用、認識論と辯證法の結合によつて、認識論としての辯證法といふ、マルクス主義哲學におけるレーニンの段階における本質的に重要な思想を準備した。また吾は辯證法を適用された模寫論が對立物の統一の法則の見地から研鑽されてゐることを見

た。徹底的な模寫論と、對立物の統一の法則を辯證法の核心として理解したること、認識論としての辯證法に關する思想とは、マルクス、エンゲルスにおいて準備され、レーニンにおいて全面的に展開されたものであり、従つてレーニンの段階の基本的内容をなすものである。そして「唯物論と經驗批判論」において、模寫論の展開によつて、その一半、即ち基礎的方面は全く完成し、他の一半、即ち辯證法の積極的解明は「哲學ノート」において遂行されたところである。

レーニンは後にマツハ主義批判を回想して、そのロシヤ的並びに國際的意義、哲學史的意義について次の如く述べた。「社會的および政治的反動の時代——、の豊富な教訓の『消化』の時代——は、哲學をも含めての基本的な理論的問題があらゆる生ける流派にとつて第一の場所の一つに提起されるやうな時代であるといふことは偶然でない。ロシヤ思想の先進的諸潮流の中には、フランス人にあつて十八世紀の百科全書派に結びついており、ドイツ人にあつてカントからヘーゲルおよびフォイエエルバッハまでの古典哲學の時代に結



びついてゐるやうな、偉大な哲學的傳統がない。だから正にロシアの先進的階級にとつては哲學的『論究』が必要であつた。そして、この先進的階級が最近の偉大なる事件の時代に自己の獨立な歴史的役割のために全く成熟した後に、この遅蒔きな『論究』がやつて來たといふことには何の不思議もない。この哲學的『論究』は、例へば新しい物理學が辯證法的唯物論の『處理』しなければならなかつたやうな一聯の新しい問題を提出してゐた限り、疾くから世界の他の國々においても準備されてゐた。この點において『吾々の』（ポトレソフの表現によれば）哲學論争は單に特定の、即ちロシア的な意義を持つのみではない。ヨーロッパは哲學思想の『新鮮化』のための材料を與へた、そして後れたロシアは一九〇八—一九一〇年の餘儀なき沈靜の時代に特に『飢ゑたやうに』この材料に飛びついて行つた」(註)。

(註) 「吾々の廢絶者」

かくて、すでに明かなやうに、一九〇五—六年の經驗によつて與へられた「豊富な教訓」を、逸脱や誤謬に對抗して正しく「消化」する必要こそが、ロシアのマルクス主義者をして、一九〇八—一〇年の「餘儀なき沈靜」の時代、勞働運動の沈滯、崩壞の時代に、哲學の研鑽に従事せしめ、「豊富な教訓の消化」に對する無能力から生じる動搖、逸脱と不可分に結びついてゐた觀念論の克服のためへ、辯證法的唯物論を展開せしめたところのものである。その際、レーニンは、マツハ主義的觀念論の理論的支柱たる物理學における觀念論的學派の吟味にまで進み、その根據を十九世紀末以來の自然科学の異常な進歩によつてかもし出された危機——經驗的研究の目まぐるしい進歩と益々集積される經驗的研究の成果を正しく概括し得ない理論的無力、方法論的貧困との間の矛盾から生じた危機——の中に見出し自然科学の進歩が辯證法的唯物論の正しさを自生的、無意識的に益々確證しつつあること、新物理學からの概念論的結論は辯證法的唯物論に對する無理解の結果であつて、決して物理學の新しい成果の正しい概括ではないこと、従つてマツハ主義は物理學



の新しい成果からの逸脱的結論に外ならないことを明かした。レーニンはかやうに觀念論的の反動との闘争を徹底的に遂行するために、ヨーロッパが提供した材料の分析、新物理学が提起した新しい問題の解明にまで進み、これらの材料、これらの問題の處理に辯證法的唯物論の展開を結びつけ、それを科學の最新の水準に適應させて新しい段階に前進させた。

(b) 哲學の前進と黨派性の理解

レーニンによる辯證法的唯物論のこのやうな前進は、プロレタリアートの經驗の「消化」を能く爲し得るものはただ辯證法的唯物論のみであり、他の一切の哲學は不可避的に政治上の修正主義や動搖に結びついてゐるものであるといふことの理解を前提とした。もしかかる理解がなく、辯證法的唯物論がマルクス主義の不可分を構成部分として理解されず、哲學の黨派性の觀點がなかつたならば、あれ程徹底的な論争は必要とされなかつたであらう。「唯物論と經驗批判論」を一貫してゐるものは哲學における黨派性の觀點であり、辯證法的唯物論は、そしてただそれのみが、マルクス主義の他の構成部分と不可分に結合

してゐる哲學説であつて、他の一切の哲學説はマルクスの學説の全般的修正を結果する(レーニンは史的唯物論に關するボグダーノフ一派の見解を吟味してこのことを證明した)といふ、確不動の科學的信念である。

このやうな態度と對照的なのは、カウツキーの態度である。宗教を國家との關係においてのみでなく、またプロレタリア政黨との關係においても「私事」とする立場に相應しく、世界觀や哲學の問題に對して自由主義的態度をとるカウツキーは、マツハ主義批判の必要をも、意義をも全く理解しなかつた。彼は當時、一ロシア人への手紙において「私はマルクス主義を哲學説として観ないで、經驗科學として、特殊な社會觀として観る」と云ひ、かかるものとしてのマルクス主義は「マツハの認識論に矛盾しない。私一個としてはマツハとデイーツゲンの見解の間に本質的な差異を見ない。ところでマルクスはデイーツゲンに甚だ近かつた」と書いてゐる。ここには哲學の黨派性マルクスの經濟學説や社會主義と辯證法的唯物論の不可分性に關する觀念は、微塵もない。カウツキーがその理論活動の總



決算たる「唯物史観」において辯證法的、唯物論とは全く別な機械論的、生物學主義的史観とカントおよびマツハの認識論の雑炊を與へてゐることは何ら偶然でない。哲學は「經驗科學」に對して中立的な「純粹科學」だ抔と考へるカント的二元論の見地からは、觀念論批判の社會的、政治的並びに理論的の意義が少しも理解せられず、マツハ主義との闘争が社會的、政治的問題に對しては中立的な「純粹」な理論的問題として、また「特殊な社會觀」たるマルクス主義の理論的前進にとつて何ら役立たない理論闘争として解釋されるのは當然である。レーニンは一九一一年に書いた論文（「吾々の廢絶者」）の中で、「カウツキーが誤謬を犯してゐることは疑のないことだ」と書き、マツハ主義の反動性、反マルクス主義的、非プロレタリアの本質と、それに對する闘争の意義について次のやうに語つてゐる。「觀念論の一變種としてのマツハ主義は、客觀的には反動の武器であり、反動の導體である。だから『下層』に對してのマツハ主義との闘争は、吾々が『上層』に對して單に十月黨やプリシユケーウイツチ輩の『敬神的な國會』のみでなく、また敬神的な立憲

民主黨、敬神的な自由主義ブルジョアジーをも見るやうな歴史的時代（一九〇八—一九一〇年）には、偶然でなく、不可避的である。

マツハ主義批判にはなほプレハーノフの「戰鬪的唯物論」（一九〇八年）、「ロシヤにおけるいはゆる宗教的探求について」（一九〇九年）を初め、デボーリンやアクセリロードの一聯の論文があるが、彼等は何れもロシヤのマツハ主義と反動時代のマルクス主義者の政治的動搖との聯關を剔抉し得ず、それに對する批判を眞實のマルクス主義的プラクシスに結び付け得なかつたが故に、辯證法的唯物論のマルクス主義的バルタイリツヒカイトを貫徹せしめ得なかつた。だからデボーリンはマツハ主義のブルジョアの反動性を認識しないで、それを「小ブルジョアの急進主義」の哲學と見做し、「プレハーノフは、マツハ主義に反對した評論において、「マツハを反駁するよりもポリシェヴィズムにフラクシヨンの損害を加へることの方に、一層苦心した」。(註一) プレハーノフは「レーニンと彼を取りまくニーチェ主義者やマツハ主義者」について語り、(註二) アクセリロードも「ポリシェヴ



イズムとマツハ主義の聯關」について論文を書いた。しかし乍らこれらの主張の誤謬はメ  
ンシエヴィキー・マツハ主義者の出現によつて明白にされた。

(註一) 「唯物論と經驗批判論」岩波文庫版下巻一五六頁

(註二) ロシヤ版「フォイエルバツハ論」へのブレハーノフの註第六

マツハ主義の階級的內容の分析におけるブレハーノフ一派の甚だしい誤謬は、マツハ主  
義に對する彼等の批判の不徹底さと決して無關係なものではないだらう。ブレハーノフは  
觀念論的反動に對する鬭争の必要を理解しないカウツキーを非難してゐるが、それにも拘  
はらず、ボグダーノフ主義をポリシエヴィズムの「主觀主義」の哲學的表現と見做した彼  
等は、マツハ主義を徹底的に、その自然科学的根據の分析にまで突込んで、批判し、克服  
しようとしなかつた。彼等はマツハ主義と物理學の危機との聯關を把握せず。その深い歴  
史的、社會的、階級的根據を捉へず、餘りにも近視眼的に、それをポリシエヴィズムの哲

學などとして片付けたがために、それに對する批判を自然科学の新しい發展水準の分析に  
結びつけることが出來ず、ただマツハ主義の內的論理的矛盾の暴露——往々にして機智に  
富んだ——によつて觀念論の不成立性と唯物論——それも特に辯證法的唯物論でなく、む  
しろ唯物論一般——の正當性を證明することに努力したにすぎず、辯證法的唯物論を少し  
も前進せしめなかつた。そのみでなく、一聯の問題において彼等は觀念論に、そしてマ  
ツハ主義に讓歩した。(ブレハーノフにおける辯證法的唯物論からの後退については後で  
簡単に觸れる)。

このやうにして吾々は哲學の黨派性についての正しい理解、それに關聯してまたマツハ  
主義の社會的階級的基礎の正確な把握が、それに對する批判の理論的內容と密接に結びつ  
いてゐるのを知ることが出来る。



## 第四章 辯證法の研鑽

### 第一節 認識論としての辯證法

レーニンの「哲學ノート」は、マルクス主義文獻の中、辯證法に關する最もまとまつた研究として極めて重要な地位を占めてゐるものである。それはレーニン自身の研究のための抜粹や覺書きであるとはいへ、そこに表白された思想は比類なく豊富な内容を持つてゐる。しかも「ノート」の最重要な部分が一九一四年から一九一六年までの間に書かれたといふのは極めて興味深いことである。

「哲學ノート」の主要部分は、「唯物論と經驗批判論」において全幅的に展開された辯證法的唯物論の認識論の土臺の上で、ヘーゲル辯證法の唯物論的改作を企てたものである。

「唯物論と經驗批判論」において辯證法的模寫論の徹底的な確立によつて前進せしめられたマルクス主義哲學は、「哲學ノート」においては辯證法の積極的究明によつて更に新たな内容を附加された。で、「ノート」において觀取される主要な新しい内容は、認識論としての辯證法（又は論理學、辯證法、認識論の同一性）に關する明確に定式付けられた思想と、對立物の統一の法則が辯證法の核心であるといふ思想の明確な定式化およびそれに關聯して辯證法の諸要素の一層詳細な解明の試みとである。そこで、これらの點について大まかな紹介を試みよう。

認識論としての辯證法といふ思想は、辯證法的模寫論から必然的に出てくるものであり、その限り明かに「唯物論と經驗批判論」において基礎づけられてゐる。辯證法は「外界並びに人間的思惟の運動の一般法則に關する科學」（エンゲルス）であるから、人間の思惟の運動、認識過程もまた辯證法的に考察されねばならぬことはもちろんである。ところで人間の思惟の一般法則、認識の範疇は、模寫論によれば、外界の運動の一般法則と「實質



上同一」であり、その反映であるから、外界の一般的な運動法則の研究は認識論に包括される。従つて認識論は、外界の一般的な運動法則その相互聯關を、それが人間の意識において認識として展開される過程に結びつけて、即ち認識の發展の見地から、考究するものである。認識論はかやうにして模寫論と辯證法の結合のおかげで「外界並びに人間的思惟の運動の一般法則」に關する科學となり、辯證法と合一する。また思惟の一般法則を考究するものとしては、認識論、辯證法は論理學と合一する。そこで、この三つのものは同一であると結論され、「論理學と認識論は『自然および精神の全生活の發展から』導き出されなければならぬ」と主張されるのである。(註)

(註)「哲學ノート」、ロシヤ本九〇頁(手許に譯本がないので、以下すべてロシヤ本によつて引用する)。

認識論としての辯證法は認識の發展史を研究し、そこで次々と展開される論理的なもの、

範疇、法則等々の歴史的繼起を、それに對する攪亂的偶然性の作用による變形から淨めて、相互の內的聯關において叙述すると共に、認識過程そのものに固有な合法則性を概括しなければならぬ。即ち、それは、第一に、人間の意識に反映した外界の一般的運動法則としての論理的なものを、その認識史的繼起の解明に基いて、相互の聯關において捉へなければならぬ。このことは科學の現代的水準および人類の先進的實踐の見地から哲學史、科學史、一般に智能の發達史を概括、要約することを必要とする。單純そのものから複雑なものへの思惟の發展、論理的なものの展開は、それによつて反映される客觀的實在の發展と大略的には合致し、(本書「資本論の辯證法」の節を参照)また、客觀的に存在する具體的全體の諸契機の相互聯關はそれら契機の歴史的繼起と大體において平行的であるが故に、認識史の要約としての內的に聯關付けられた論理的なものの總體は同時に客觀世界の一般的發展の略圖その一般的運動法則の總體の見取圖である。ところでこの見取圖をより正確ならしめる爲には、それを最新の科學の達成、世界史そのものの新たな經驗、先進



的實踐による検証に照らし合はせることが無制約的に必要となる。だから認識の發展史の要約がただ「現代」の見地からのみ正當に爲され得ることは、一般に「現代」の見地を抜きにした歴史（科學としての）があり得ないのと同様である。

認識論としての辯證法、即ちまた論理學がかやうに思惟の歴史や科學史や實踐（産業、技術）の歴史の要約でなければならぬといふ思想は「哲學ノート」の到る所で強調され、これによつて哲學的科學としての辯證法の建設のためのプログラムが與へられてゐる。

「論理學は思惟の外的形式に關する學ではなくて、『すべての物質的、自然のおよび精神的なもの』の發展の法則、即ち世界の全具體的内容とその認識との發展の法則に關する學である、即ち世界の認識の歴史の總決算、總和、雜論である」。<sup>（註二）</sup>「ヘーゲルおよびマルクスの事業の繼續は人類の思想、科學および技術の歴史の辯證法的仕上げにまたなければならぬ」。<sup>（註三）</sup> かやうな見地から、レーニンは「認識論と辯證法がそこから生成さるべき所の知識領域」として「哲學史、從つて、個々の科學の歴史、兒童の智的發達史、動

物の智的發達史、言語の歴史、プラス心理學、プラス感覺器官の生理學」、簡單にいへば、「認識一般の歴史」を指示してゐる。<sup>（註三）</sup> そしてかかる「認識一般の歴史」の要約に當つて、辯證法の諸法則、諸範疇が、現代の科學、歴史、實踐によつて提起される具體的問題の究明への適用において、具體的に、精密に研磨されなければならぬことも、レーニンが隨所で述べた所である。例へば先きに引用した論文「吾々の廢絶者」において、實踐の豊富な教訓の消化、の仕事が哲學問題を前面に押し出すとか、哲學的「論究」は「新物理學が辯證法的唯物論の『處理』しなければならなかつた一聯の新しい問題を提出した」ことによつて準備されたとか云つてゐる場合がそれである。かかる主張は晩年に「戰鬪的唯物論の意義について」の中で古典的明確さをもつて述べられた。單に主張したのみでなく、レーニンが實際にこの主張を實現したことは、彼が辯證法の見地からの自然科學の現代的問題の吟味によつて、また彼自身のプラクシスへの辯證法の巨匠的な適用によつて、それを前進させたのを見ても、全く明白である。



(註一) 「哲學ノート」九四頁

(註二) 同上 一四四頁

(註三) 同上 三二一頁

次に、第二に、認識論としての辯證法は、認識發展の固有な合法則性を論究しなければならない。客觀世界の運動は直ちにすつかり人間の意識に反映するのではなく、意識は人間の實踐を基礎として、一聯の獨自な手続きによつて客觀世界を認識するのだから、認識論は、單に意識に反映した客觀的實在の一般的運動法則、自然現象間の結び目、範疇としての論理的なものを、その歴史的繼起と相互聯關において考究するだけでは不充分である。かかる考究そのものは、客觀世界の發展の產物であると同時にそれに對して相對的獨立性を持ち、それを對象として把握するところの意識の特殊な合法則性の闡明に結びつけられなければならない。物質から感覺へ、そして感覺から思惟への認識の運動過程における特

殊な合法則性の究明が基礎に横はつてゐなければ、論理的なものの繼起や聯關も正しく把握せられない。レーニンは、「單に物質から意識への移行のみならず、感覺から思考への移行等もまた辯證法である」とか、「辯證法の信奉者ヘーゲルは、物質から運動へ、物質から意識へ、の辯證法的移行——特に後者の方を理解し得なかつた」と云ひ、物質から意識への移行、即ち感覺の發生と感覺から思惟への移行の辯證法的理解——同時に唯物論的理解——がなければ「神秘説の誤謬」を避け得ないといふ思想を表白してゐる。<sup>註</sup>「唯物論と經驗批判論」において全幅的に詳述された辯證法的模寫論は、正に「物質から意識への辯證法的移行」の唯物論的理解に外ならなかつた。そしてかかる移行の理解は特に心理學や神經系統の生理學によつて科學的に基礎づけらるべき筈のものである。

(註) 「哲學ノート」二八九頁

「哲學ノート」においては、「唯物論と經驗批判論」において展開された模寫論の内容が



就中ヘーゲル辯證法の研究を通して深められてゐる。そこでは客觀的實在の模寫としての認識、認識の發展における實踐の役割、實踐を基礎としての認識の相對性と客觀的眞理との辯證法的統一について、「唯物論と經驗批判論」で語られた同じ思想が、より深刻な定式化において隨所に書かれてゐる。

「認識は人間による自然の模寫である。しかしそれは單純な、直接的な、全體的な模寫ではなくて、一聯の抽象と、概念、法則等の定式化、形成との過程であつて、かかる概念や法則等（思惟、科學『論理的理念』）は正に永遠に運動し發展する自然の普遍的合法性を條件的に、近似的に捉へるものである。ここには現實に、客觀的に三つの項がある、即ち（1）自然、（2）人間の認識『人間の腦（同じ自然の最高の産物としての）および（3）人間の認識における、自然の反映の形式がある。この形式が正に概念、法則、範疇等である』。（註一）

「理論的認識は客觀をその必然性において、その全面的關係において、その自身および

對自の矛盾的運動において與へなければならぬ。だが人間の概念は、概念が實踐といふ意味における『對自の存在』となるときに初めて認識のこの客觀的眞理を『最終的に』掴み、捕捉し、擅有する。即ち人間および人類の實踐は認識の客觀性の檢證であり規準である』（註二）。

「認識は客觀への思惟の永遠な、無限な近迫である。人間の思想における自然の反映は『死んだものとして』、『抽象的に』、運動なきものとして、矛盾なきものとして理解さるべきでなく、永遠なる運動過程、矛盾の發生とその解決の過程において理解さるべきである』（註三）。「眞理は過程である。人間は主觀的理念から『實踐』（および技術）を通して、客觀的眞理に進む」。『生命は腦を生む。人間の腦には自然が反映する。人間は自己の實踐および技術においてこれらの反映の正しさを檢證し且つ適用しつつ、客觀的眞理に到達する』（註四）。

これらのすべての命題は「唯物論と經驗批判論」において展開された模寫論の内容を定



式付けたものである。

(註一) 「哲學ノート」一七六頁

(註二) 同上 二〇二頁

(註三) 同上 一八八頁

(註四) 同上 一九三頁

このやうにして認識論としての辯證法は、模寫論を包括し、且つそれを基礎としなければならぬ。さうでなければ、辯證法は唯物論的でありえないだらう。

ところで「哲學ノート」においては、單に「物質から意識へ」の移行のみでなく、また「感覺から思考へ」の移行に關する問題が提起され、感覺と概念、個別的なものと一般的なもの、具體的なものと抽象的なもの——これらの對立物がその統一と矛盾において解明され、そのことによつて模寫論の内容は一層豊富にされ、詳細に仕上げられてゐる。レ

ニンは「概念と、經驗、感覺、感官の『綜合』、總和、要約との合致はすべての流派の哲學者にとつて疑へないことだ」(註一)といふ見地に立つてゐるが、同時に感覺的に興へられる個別的なもの、具體的なものと、思惟によつて反映せしめられる一般的なもの、抽象的なものを對立物として、即ち統一において互ひに矛盾するものとして、辯證法的に把握する。

「一般的なものはただ個別的なものの中のみ、個別的なものを通してのみ存在する。あらゆる個別的なものは(何らかの仕方)一般的なものである。あらゆる一般的なものは個別的なものの(微部分又は側面又は本質である)。あらゆる一般的なものはただ近似的にのみすべての個別的對象を捉へる。あらゆる個別的なものは一般的なものの中へ不完全にしか入らない等々」(註二)。

「一般的なものの意義は矛盾してゐる、それは死んでおり、それは不純であり、不完全である等々。だが正にそれのみが、具體的なものの認識への段階である、蓋し吾々は決して具體的なものを完全には認識しない。一般的な概念、法則等の無限の總和が、具體的な



ものを全體的に與へる」(註三)。

「思惟は具體的なものから抽象的なものの上昇するとき、——もしそれが正しいものであるならば、——真理から遠ざからないで、それに接近する。物質、自然法則といふ抽象、價值といふ抽象等々、一口にいへばすべての科學的な(下らないものでなく、正しい、眞面目な)抽象は自然をより深刻に、より正確に、より完全に反映する。生ける直觀から抽象的思惟へ、そしてそれから實踐へ——かくの如きが真理の認識、客觀的實在の認識の辯證法的道程である」(註四)。

(註一) 「哲學ノート」二九一頁

(註二) 同上 三二七頁

(註三) 同上 二八五頁

(註四) 同上 一六六頁

## 第二節 辯證法の核心とその諸要素の展開

認識論としての辯證法に關するレーニンの思想の以上のやうな斷片的な引用によつても、そこで彼が如何に歴史的なものと論理的なもの、客觀と主觀、客觀的眞理と相對的眞理、物質と意識、感覺と概念等々を對立物の統一の法則によつて把握してゐるかが判明するだらう。對立物の統一が辯證法の核心であるといふことを疑問の餘地なき迄に明白にしたのはレーニンであり、それは實に「哲學ノート」において充分に行はれたことである。

「辯證法は、如何にして對立物が同一でありうるか、又同一であるか、——如何なる條件の下で對立物は同一であり、互ひに轉化するか、——何故に人間の知性はこれらの對立物を死んだ、凝固したものととしてでなく、生きた、條件的な、動的な、互ひに轉化するものとして受取らねばならないか、に關する學である」(註一)。「本來の意味においては辯證法は對象の本質、そのものにおける矛盾の研究である」(註二)。「簡単に辯證法を對立物の統



一に關する學說として規定することが出来る。これによつて辯證法の核心は擱まれるであらう、だがこれは解明と展開を要求する」(註三)——これが、辯證法の核心に關するレーニンの諸命題である。その場合彼は對立物の統一における矛盾の絶對性を指摘することを忘れない。「對立物の統一……は條件的、一時的、經過的、相對的である。相互に排撃する對立物の鬭争は、發展、運動が絶對的であるのと同様に絶對的である」(註四)。

(註一) 「哲學ノート」一〇九頁

(註二) 同上 二六三頁

(註三) 同上 二二三頁

(註四) 同上 三二六頁

辯證法が「發展に關する最も全面的な、内容豊富な、深刻な學說」(註)であるのは、とりも直さずそれが對立物の統一の法則の見地から、發展を對立物の鬭争として把握するか

らである。レーニンは斷篇「辯證法の問題に寄せて」の中で、發展に關する二つの見方——發展を「減少および増大、反覆」として捉へる見方と「對立物の統一」、「互ひに排斥する對立物への統一的なものの分裂とこれらの對立物間の相互關係」として捉へる見方——を區別し、ただ第二の見方のみがすべての存在物の「自己運動」の理解の鍵を與へ、「飛躍」、「漸次性の中斷」、「反對物への轉化」、「舊いものの絶滅と新しいものの發生」の理解の鍵を與へる、といふことを述べてゐる。それで、「統一的なものの分裂とその矛盾せる諸部分の認識とは……辯證法の本質」であり、「世界のすべての過程をその『自己運動』、自發的運動において、その生ける生命において認識する條件は、それを對立物の統一として認識することである」。

(註) 「カール・マルクス」

辯證法の核心がこのやうに理解された上で、もつと具體的に、辯證法の種々の契機が問



題にされる。かかるものとして、レーニンは例へば「飛躍、矛盾性、漸次性の中斷、存在と非存在の統一（同一性）」<sup>(註二)</sup>とか、「例外なく『すべて』の概念の相互依存、例外なく『すべて』の概念の相互移行、概念間の對立の相對性、概念間の對立性の同一性」<sup>(註三)</sup>を挙げ、また「辯證法の要素」として「(1) 概念のそれ自身からの規定（物そのものはその関係と發展において考察されねばならない）、(2) 物そのものにおける矛盾、あらゆる現象における矛盾せる諸力と諸傾向、(3) 分析と綜合の結合」を挙げ、「これらの要素は恐らくより詳しくは次のやうに表示され得る」ものとして、次にかかげる十六の要素を列挙してゐる。

- (1) 觀察の客觀性（例證でなく、枝葉の論でなく、物それ自體）。
- (2) この物の他のものに對する多様な關係の總體。
- (3) この物（從つて現象）の發展、その固有の運動、その固有の生命。
- (4) この物における內的に矛盾した諸傾向（および諸側面）。

- (5) 對立物の總和および統一としての物（現象等）。
- (6) これらの對立物の鬭争、從つて展開、諸動向の矛盾性等。
- (7) 分析と綜合の結合——個々の部分の吟味とこれらの部分の總合、總括。
- (8) 各々の物（現象等）の關係は單に多様であるのみでなく、一般的、普遍的である。各々の物（現象、過程等）は各々の物と聯繫してゐる。
- (9) 單に對立物の統一のみでなく、各々の規定、質、特徴、側面、性質の各々の他のもの（自己の反對物）への移行。
- (10) 新しい側面、關係の發見の無限の過程。
- (11) 物、現象、過程等についての人間の認識が現象から本質へ、そしてより深くない本質からより深い本質へと深まつてゆく無限の過程。
- (12) 併存から因果性へ、そして聯關と相互依存との一つの形態から、他の、より深い、より一般的な形態へ。
- (13) 下位の段階の一定の特徴、性質等の、上位の段階においてのくり返し、および。
- (17) 舊いものへの外見上の復歸（否定の否定）。



- (15) 形式に對する内容の闘争およびその逆。形式の放擲、内容の改造。  
(16) 量の質への移行およびその逆(註三)。

(註一) 「哲學ノート」二八九頁

(註二) 同上 一八九頁

(註三) 同上 二一一―二一二頁

レーニンは單に辯證法の諸要素を列挙したり、それを書物の上で學んだのではなかつた。彼はマルクス、エンゲルス以後の何人にもまして辯證法の具體的適用を能くし、それによつて辯證法を、その諸範疇、諸契機を科學的に研磨した。彼の帝國主義論、國家論、ソヴェート建設に關する諸學說等々は、社會生活への適用において具體化された辯證法の天才的な典型であると云ふことが出来る。レーニンはイムピリアリズムの時代の社會發展の把

握において辯證法をかくも全能的に適用するに當つて、つねに一聯の非辯證法的な見解と鋭く闘はなければならなかつた。彼は、辯證法の第一の要素たる「觀察の客觀性」から外れて、「主觀主義の論理學」、形式論理學に立脚してゐる方法としての詭辯論と折衷主義を批判し、かかるものを政治的方法論とするところのカウツキー、ヴァンダーヴェルド、プレハーノフ等と闘つてゐる。

「概念の全面的、普遍的屈伸性、對立物の同一性にまで到達する屈伸性——これが肝心だ。主觀的に適用されたこの屈伸性は折衷主義および詭辯論に等しい。客觀的に適用された、即ち物質的過程の全面性とその統一を反映する、屈伸性は、辯證法であり、世界の永遠な發展の正しい反映である」(註)。

(註) 「哲學ノート」一一〇頁

彼はマルクス主義の一聯のレネガートや修正主義者に對する痛烈な政治的批判(特に一



九一四年以後の時代に、つねに彼等の方法論——折衷主義、詭辯論、一般に形而上學的方法——に對する批判に密接に結びつけて遂行し、かかる問題の解決に辯證法的方法を全幅的に浸透させることに成功した。

かくて例へばレーニンは「十月」の批判者となつたカウツキーやヴァンダーヴェルドについて、「ヴァンダーヴェルドは、カウツキーと同じく辯證法と折衷主義のすり替へにかけては偉大なる名人である」と云ひ、「カウツキーやヴァンダーヴェルドの折衷主義と詭辯論は、ブルジョアジーに都合よいやうに、、、、におけるすべての具體的なものや正確なものを糊塗する」と述べてゐる<sup>(註一)</sup>。或はまた「マルクスにとつては辯證法は決してプレハーノフ、カウツキー等がさうしたやうな空虚な言葉、ガラガラ玩具ではなかつた」とも云つてゐる。プレハーノフについては、レーニンはすでに一九〇六年に、「プレハーノフの戰術上の日和見主義が、マルクス主義的方法の基礎の丸つきりの否定である」<sup>(註二)</sup>こと、また一九〇七年には、「具體的な問題に對する解答を……一般的真理の單

なる論理的展開に求めようとする」彼の政治的傾向が「マルクス主義の俗悪化であり、辯證法的唯物論に對する全くの愚弄である」こと、「プレハーノフの議論は形而上學の見本であることを指摘し<sup>(註三)</sup>、世界戦争時代には彼のパトリオティズムの理論の詭辯的性質を痛烈に暴露した。<sup>(註四)</sup>レーニンは第一次世界戦争に關しては、カウツキー<sup>(註五)</sup>やローザ・ルクセムブルグ<sup>(註六)</sup>の一面的な見解が共に詭辯論であることをも明かにし、そしてそこで辯證法と詭辯論や折衷主義の相異について明確な説明を加へてゐる。

(註一) 「カウツキーの小冊子のロシア譯への序文」

(註二) 「背教者カウツキー」への附録

(註三) 「ロシアにおける資本主義の發達」第二版序文

(註四) 「ロシアのジユデクム」

(註五) 「第二インタナショナルの破綻」

(註六) 「ユニユースのプロシユールについて」



カウツキー主義者やメンシェヴィキーは、要するに、レーニンによれば、「マルクス主義における決定的なもの、即ちその……辯證法を全然理解しなかつた」のである（註）。

（註）「わが、にっしつ」

一九二一年に、労働組合に関する論争が行はれたときには、レーニンは、ブハーリンが「政治と經濟の辯證法的相關關係を折衷主義にすり替へ」、「マルクス主義の辯證法を折衷主義（種々の『流行の』反動的な哲學體系の著者達の所で特に廣まつてゐるところの）にすり替へ」たことを指摘し、折衷主義の基礎となる形式論理學に對して辯證法的論理學の特徴を説明してゐる（註）。

（註）「再び労働組合について」

かやうに辯證法を社會過程の認識に、政治に適用したレーニンは、辯證法の諸要素、諸

範疇の中、實踐的關係において特に重要な、根本的なものを前面に持ち出し、それに理論的照明を加へた。すでに「何をなすべきか」において展開された經濟と政治、自然成長性と意識性の辯證法的交互關係、「十月」直後にスハーノフに對する批判において論述された生産力と生産關係の交互作用、社會發展の一般的合法則性と各國、各時代の條件の特殊な複合との辯證法的統一、その他種々の場合に論及された可能性と現實性、客觀的可能性と主觀的條件の辯證法的關係——これらすべては「世界を變化」させるプラクシスの見地から提起され、解決を要求されたものであり、そしてレーニンはその正しい解決の方法として辯證法を適用し、同時にそれによつて辯證法を具體化した。

ところで、これらの問題の根底をなすものは、客觀的社會過程とそれに働きかける主體との間の關係であり、この關係は單なる唯物論的解釋、經濟的唯物論の精神における解釋でなくて、正に辯證法的な解釋をこそ要求するものであつた。つまり、客觀主義に對抗して、社會發展の辯證法を明かにする事がレーニンにとつて肝要であつた。これは、彼の時



代の國際的並びにロシア的事情がプロレタリアートの優れた理論的頭腦に押しつけた課題であつたのである。いま、ここで、社會發展の理論、史的唯物論の分野においてレーニンが辯證法とその諸要素を如何に具體的に發展させたかを検討する餘白はないから、一言で、エンゲルスがすでに晩年にやつたやうな、史的唯物論における辯證法的側面の展開を、一層プラクシスに密接した問題の取扱において徹底化せしめたのがとりも直さずレーニンだといふことを指示するに止めよう。社會發展についての彼の辯證法的把握は、辯證法とその諸契機の科學的研鑽であると共に、また社會生活における客觀主義、機械論的、自然主義的逸脱に對する批判に當つて最も有力な要具として役立つものである。だがもちろんこのことは、それが觀念論や主觀主義に少しでも傾いてゐるといふことを意味するものではない。確固たる唯物論的基礎の上に立つてゐるからこそ、辯證法は眞に社會生活の科學的、唯物論的把握の方法となり得たのである。

## 第五章 辯證法的唯物論の發展における新段階

### 第一節 哲學者としてのレーニンとプレハーノフ

マルクス主義哲學におけるレーニンの段階について語る場合には、レーニンとプレハーノフの關係、この兩思想家の哲學說の比較は極めて重要なテーマとして提起される。これはまた非常に多面的な内容を包含する問題であつて、本書では到底充分に論じることが出来ないから、ただ要綱だけを記すことにする。

レーニンが哲學者としてはプレハーノフの門下であり、プレハーノフがマルクス、エンゲルス以後の國際マルクス主義者の間で最大の哲學者であつたといふ見解は今日では全く否定されてゐる。プレハーノフはロシアにおけるマルクス主義の最初の最も優れた宣傳家、



啓蒙家として十九世紀末に大きな役割を演じた。彼はまたレーニンを除けば、疑もなく第二インターナショナルのどの思想家——ベルンシュタイン、ベーベル、カウツキー、メーリング、K・リープクネヒト、ルクセムブルグ等——よりも哲學者としては優れてゐた。彼はミハイロフスキーや、ベルンシュタインや、ボグダーノフや、ルナチャルスキー等に對する論争的著作の外に、唯物論史や、空想的社會主義や、唯物史觀や、辯證法的唯物論に關する幾多の勞作を遺した。レーニンは、「プレハーノフによつて哲學について書かれたすべてを研究——正に研究だ——することになしには意識的な、眞實の、コンムニストたることは出来ない、何故なら、それは國際マルクス主義文獻における最良のものだからである」と云つてゐる。(註)

(註) 「再び勞働組合について」

だがプレハーノフが最良の哲學者だといふレーニンの言葉は、レーニンを除けば、とい

ふ條件付きで解釋されなければならない。事實、プレハーノフは辯證法的唯物論を前進させてゐない。彼はその通俗化的解説家として優れてゐたので、理論の積極的研鑽に對しては無力であつた。このことは、レーニンがすでに一九〇五—〇七年の時代にプレハーノフの政治的方法論における形而上學を非難してゐることからも分るやうに、彼が辯證法を、哲學を具體的知識や實踐的な問題に結びつけて展開する能力を缺いてゐたこと、彼における哲學と實踐の分離と深く關聯してゐるものである。彼は單に社會過程の把握においてレーニンからその形而上學、詭辯論を暴露されたばかりでなく、また哲學問題を自然科学に結びつけることも、辯證法的唯物論をば自然科学の發展によつて提起される新しい問題の吟味を通して前進せしめることも出来なかつたことを指摘された。

「新物理學、又はもつと正確には新物理學における一定の學派と、マツハ主義およびその他の現代觀念論哲學の諸變種との聯關は疑ひを容れない。この聯關を無視してマツハ主義を吟味する——プレハーノフがやつてゐるやうに——ことは、辯證法的唯物論の精神を



愚弄すること、即ちエンゲルスのあるこれの文學のためにエンゲルスの方法を犠牲にすることを意味する」(註二)。「ああ！ プレハーノフはこの『新しい潮流』(自然科学における——筆者)について沈黙してゐる、彼はそれを知らないのだ」(註三)——とレーニンは指摘してゐる。

(註一) 「唯物論と經驗批判論」岩波文庫版下巻六〇七頁

(註二) 「哲學ノート」四一六頁

そればかりでなく、一聯の本質的な問題においてプレハーノフには辯證法的唯物論から後退、逸脱があるといふことを明白にする必要がある。これは、哲學におけるレーニンの段階の本質的内容として、一つの不可分な全體へと統一されてゐるところの、模寫論、認識論としての辯證法、辯證法の核心としての對立物の統一、といふ三つの契機——マルクス、エンゲルスにおいて基礎を置かれ、レーニンによつて新段階へ發展せしめられたこ

の三つの契機——が、プレハーノフにおいて如何になつてゐるかを對照するならば、容易に明白にされることである。

先づ模寫論の問題を取り上げて見る。

プレハーノフがこの問題で唯物論から後退して、不可知論の側に傾いたことは、「唯物論と經驗批判論」において明確に指摘された。觀念論との鬭争のために徹底的な模寫論を展開しなければならなかつたレーニンは、かかる展開過程においてプレハーノフの偏向をも當然に克服する必要に迫られたのである。プレハーノフは、「吾々の感覺は現實において起つてゐるところのことを吾々に報知する一種の象形文字である。象形文字は、それが傳達するところの出來事に似てゐない」(註一)といふ不可知論的認識論、ヘルムホルツ流の記號説の見地に立つた。そこでレーニンはかかる「象形文字的唯物論」、「プレハーノフの誤謬」を説明するために、特に一節を割き、象形文字説の原型たるヘルムホルツの記號説の批判に立ち入つてゐる(註二)。プレハーノフの象形文字説は決してデボーリンの云ふ様



に「單に用語に歸着するもので、問題の本質には關係しない」やうなものではない。プレハーフはいつも、認識が客觀の模寫であることを否定して、吾々の表象は感覺器官の構造の特殊性による屈曲の故に決して客觀を模寫するのではなく、單に「客觀における各々の變化には主觀に對するその作用の變化（従つて表象の變化——筆者）が照應する」にすぎぬと見做し、表象は客觀に「似てゐない」といふ見地を固執した（註三）。後にプレハーフの認識論から機械論者サラビヤノフが主觀主義、相對論を結論したのは決して偶然でない。またアクセリロードが「唯物論と經驗批判論」における模寫論を非難したのも自然のことである。

（註一） ロシヤ譯「フオイエルバツト論」への註釋

（註二） 「唯物論と經驗批判論」第四章第六節參照

（註三） プレハーフ「唯物論かカント主義か」

プレハーフはまたロシヤ譯「フオイエルバツト論」への序文において「ドイツの一著作家（經驗批判論者カルスタニエン——筆者）は經驗批判論にとつては經驗は單に研究對象であつて、決して認識手段ではない」と指摘してゐる。さうだとすれば、經驗批判論と唯物論の對置は意味を失ふ」云々と述べ、經驗の經驗批判論的解釋に賛同した。レーニンは彼のこの「全くの混亂」を暴露し、「經驗といふ言葉の上には疑もなく哲學における唯物論的方向も觀念論的方向も隠され得る」ものであること、だが「經驗を研究對象として規定するのも、認識手段として規定するのも、未だこの點について何の解決にもならない」といふことを指摘し、問題は經驗を唯物論的に理解することだと書き、またその他一聯の問題においてプレハーフの逸脱を是正してゐる。

（註） 「唯物論と經驗批判論」第三章第二節參照

更に認識論としての辯證法については、レーニンは「辯證法は正に（ヘーゲルおよび）



マルクス主義の認識論である。問題のこの『側面』(それは問題の『側面』でなくて問題の本質だ)こそ、他のマルクス主義者はもちろんのこと、プレハーノフも注意を向けなかつたところのものである」と書いた(註)。プレハーノフは辯證法を認識論として把握せず、従つて辯證法と融合した認識論を與へ得ず、單に認識論の問題において唯物論から、模寫論から逸脱したのみでなく、また辯證法を展開することも出来なかつた。彼は主觀と客觀、意識と物質、感性和思惟、抽象と具體、相對的眞理と絶對的眞理等々の如き問題を、正に辯證法的に提起し、解決することが出来なかつた。彼は決して認識發展のこれらの契機をその相互の矛盾と統一において、レーニンのやうに深刻に辯證法的に把握しなかつた。彼は認識論における辯證法的側面——單に唯物論的基礎でなくて——を展開しなかつた。

(註)「哲學ノート」三二七頁

このことは他面では、プレハーノフが辯證法を、その核心を正確に擲んでゐなかつたこ

とを意味する。で、レーニンは「辯證法のこの側面(對立物の統一——筆者)に普通(例へばプレハーノフにおいて)充分に注意が拂はれてゐない。即ち對立物の統一は實例の總和として取り上げられてゐて、認識の法則(および客觀世界の法則)として取り上げられてゐない」(註)と指摘してゐる。従つてプレハーノフが唯物辯證法から形而上學や舊唯物論の方へ或る程度まで逸脱したことは自然である。「プレハーノフはカント主義(および不可知論一般)を辯證法的唯物論の見地よりはより多く俗流唯物論の見地から批判してゐる、彼が彼等の議論を單に頭から否認して、これらの議論を是正し(ヘーゲルがカントを是正したやうに)、それを深め、擴張し、ありとあらゆる概念の聯關と移行を示すことをしてゐない限りでは」(註)。プレハーノフの觀念論批判は、觀念論をその認識論的根據から説明し、人間の矛盾に充ちた多様な認識契機、認識過程のジツグザツグのあれこれの側面の一面的固執、絶對化が觀念論の認識論的根據であることを剔扶するところまで進まず、例へばマツハ主義の成立を認識の辯證法の一契機たる人智の相對性の原理の一面的擴



張から説明し得ず、觀念論を「ヘーゲルのよりはより多くフォイエルバッハ的に」一概に愚論として斥けてしまつた。彼は哲學問題を認識論的に、且つ辯證法的に認識發展の辯證法の究明といふ見地から取扱はなかつた。だから「ブレハーノフは哲學（辯證法）について、恐らく千頁も書いた。それらの中、大論理學については、それに關聯しては、その思想（即ち哲學的科學としての、本來の辯證法）に關聯しては、何ものもない」<sup>(註三)</sup>。

(註一) 「哲學ノート」三二五頁

(註二) 同上 一七三頁

(註三) 同上 二八三頁

辯證法からの後退は、ブレハーノフの唯物論を著しくスピノザ的乃至フォイエルバッハ的な觀照的唯物論に接近させる。彼は「マルクスの認識論はフォイエルバッハの認識論から一直線をもつて出てくるものである、又はそれは元來正にフォイエルバッハの認識論であつて、ただマルクスによつて爲された天才的訂正によつて深められただけのものである、

と云つてもよい」とか、「マルクス、エンゲルスのスピノザ主義は最新の唯物論であつた」と考へた<sup>(註一)</sup>。ブレハーノフにおける理論と實踐、哲學と政治の分離は、元來、彼のフォイエルバッハ的な觀照的見地と不可分のものであり、これに關聯して彼は先きに述べたやうに哲學の黨派性の觀念に無縁であつた。彼はストルーヴェ等の新カント主義の批判を最初少しも必要と見做さず、ベルンシュタイン主義の擡頭後に漸くそれに取りかかり、しかも自ら「新カント主義に關して云へば、彼等が自己の哲學的見地を變へることなしにマルクスの經濟學のおよび歴史哲學的見解の正しさを認めうるといふことを、肯定的に語らねばならない」<sup>(註二)</sup>といふ見地に立ち、哲學の黨派性についての無理解を露呈し、一九〇七年の反動時代に全く敬神的な自由主義ブルジョアジーのイデオログとしてあらはれたストルーヴェの哲學に對して決定的批判を與へることを必要と見做さなかつた。

(註一) 「マルクス主義の根本問題」

(註二) 「經濟的要因について」(一九三一年に發表されたストルーヴェ批判の準備原稿)。



またプレハーノフにおける辯證法の不正確な理解に關聯して、「形式論理學の規則による思惟は辯證法的思惟の特殊な場合である」とか、「辯證法は形式論理學を撤廢しないで、ただその法則から形而上學者がそれに賦與する絶對的意義を剝奪するにすぎぬ」(註) 抔と主張して、形式論理學に獨立的意義を認め、それだけ辯證法の範圍を縮めた彼の誤謬を指摘する必要がある。

(註) ロシヤ譯「フオイエルバッハ論」への序文

以上要するに、プレハーノフは大體においては辯證法的唯物論者であり、その通俗化の上で、また新カント主義やマツハ主義に對する批判、辯證法的唯物論の擁護の上で大なる功績を持ち、彼の哲學的遺産の中には攝取さるべき要素もあつたにかかはらず、彼は一聯の本質的な點において辯證法的唯物論から後退し、模寫論を展開せず、不可知論的偏向を犯

し、認識論としての辯證法を理解せず、辯證法のコルネとしての對立物の統一の法則を明確に把握せず、觀照的見地に傾斜し、政治的方法論においては「一般的眞理の單なる論理的展開」、抽象的形式主義、詭辯論に陥つた。レーニンがプレハーノフの哲學的勞作を第二インタナショナルの最良のものとして云つた場合にも、彼はプレハーノフのこれらの誤謬に對する批判を決して怠りはしなかつた。

プレハーノフとその一派はボリシエヴィズムにブランキズム、主觀主義、ニーチエ主義等のレッテルを貼りつけ、ボグダーノフ主義が流行するや、それにボリシエヴィムの主觀主義、ブランキズム等の哲學的表現の刻印を押し、自らは辯證法的唯物論の正統派をもつて任じたが、歴史はボリシエヴィズムに對するプレハーノフのかかる見解の誤謬を完全に證明し、彼の哲學にも、彼の政治的オポチュニズムに照應して、マルクス主義からの一聯の逸脱があることを明かにした。辯證法的唯物論はマルクス、エンゲルス以後、自然科学の新しい達成の概括とイムピリアリズムの時代の沸騰する社會生活の諸問題の理論的照明



とにそれを密接に結びつけたレーニンによつて、しかもただ彼によつてのみ、前進させられたのである。

## 第二節 辯證法的唯物論の現代的課題

辯證法的唯物論の一層の前進が、現代において、ただレーニンによつて進められた方向に押し進められてのみ正しく遂行されうることはもはや明かであらう。レーニン自身、一九二二年に、當時創刊された許りのマルクス主義的哲學雜誌「マルクス主義の旗の下に」への寄書「戰闘的唯物論の意義について」の中で、「唯物論と經驗批判論」や「哲學ノート」において遂行された哲學的研究の方針を要約して、辯證法的唯物論者に次のやうな任務を提起してゐる。

第一は、非マルクス主義者の陣營からの徹底的な唯物論者と提携して一切の哲學的反動、觀念論的世界觀との容赦なき闘争を遂行することである。「、、的唯物論の機關たらんと

欲する雜誌は、第一に、すべての現代の『僧侶主義の學位ある召使』を撓みなく暴露し且つ追求するといふ意味において、戰闘的な機關でなければならぬ」。

「かかる雜誌は、第二に、、的無神論の機關でなければならぬ」。そして無神論的世界觀の普及のために、レーニンはフランス唯物論者の「果敢な、生き生きした、才氣ある、機智に富んだ、そして公然と支配的な僧侶主義を攻撃してゐる」文獻の紹介やブルジョア無神論者の著書の利用、即ち「ブルジョアジの進歩的部分との提携」が不可欠な條件であることを強調する。

第三に、、的唯物論にとつては、先きにあげたやうな非マルクス主義者たる唯物論者との提携の外に、「唯物論に傾いており、そして唯物論をば所謂『教養ある社會』において支配してゐる觀念論や懷疑論の側への流行的な哲學的動搖に對抗して主張し、説教することを怖れないところの、現代自然科学の代表者達との提携も、それに劣らず——それ以上でないにしても——重要である」。ここでレーニンは「唯物論と經驗批判論」における



と全く同じ精神をもつて、現代自然科学の危機が觀念論的結論を生んでゐること、そしてただ辯證法的唯物論のみがこの危機を打開し、現代自然科学からの誤れる觀念論的結論を克服し得るものであることを説明する。「正に現代自然科学が經驗してゐる急激な崩壊からは、始終反動的な哲學的學派や小學派、流派や小流派が生れるといふことを銘記しなければならぬ。だから自然科学の領域における最新の變革が提起してゐるところの諸問題を追跡し、そして哲學雜誌におけるこの活動に自然科学者を引き入れること——この課題の解決なしには戰鬪的唯物論は如何なる場合にも戰鬪的でも唯物論でもありえない。……吾吾は、強固な哲學的基礎づけなしには如何なる自然科学も、如何なる唯物論もブルジョアの觀念の襲撃とブルジョア的世界觀の復活とに對する鬪争に堪え得ないといふことを理解せねばならぬ。この鬪争に堪え、且つそれを最後まで行ひ抜いて完全に成功するためには自然科学者は現代唯物論者たり、マルクスによつて代表された唯物論の意識的信奉者たらねばならぬ、即ち辯證法的唯物論者たらねばならぬ」。

ところで、第四に、この目的を達するためには「唯物論的見地からのヘーゲル辯證法の系統的研究を組織せねばならない。この辯證法こそは、マルクスがその『資本論』においても、その歴史のおよび政治的勞作においても實踐的に適用したところのものである。しかも今生活と鬪争とへの東洋……における新しい階級——即ち地球人口の大部分を成し、そしてその歴史的無活動と歴史的睡眠とによつて今までヨーロッパの多くの先進國家における沈滞と頽廢とを制約してゐたところの、幾億の人類——の毎日の目醒め、生活への新しい國民と新しい階級の毎日の目醒めがますますマルクス主義を確證しつつある、といふ程成功的に適用したところのものである」。斯様に、現代の歴史そのものが辯證法の正しさを確證してゐるといふことを強調した後、レーニンはヘーゲル辯證法の研究の極度の困難さやそれに伴ふ誤謬の可能性を指示し、そして次のやうに結論する。「吾々は、マルクスが唯物論的に理解されたヘーゲル辯證法を如何に適用したかに依據して、この辯證法をすべての方面から究明し、ヘーゲルの主要な著作からの拔萃を雑誌に印刷し、それを唯物論



的に解釋して、マルクスにおける辯證法の適用の手本や並びにまた最近の歴史、特に現代の、、、、が、異常に多く與へてゐる様な、政治的經濟的關係の領域における辯證法の手本やによつて解説することが出来るし、またせねばならない。……現代自然科学者は、自然科学における變革によつて提起されてゐるところの、またブルジョアの流行のインテリゲンチヤの禮拜者たちを反動へと『外らせる』ところの、哲學上の諸問題に對する一聯の答辯を、唯物論的に解釋されたヘーゲル辯證法に見出すであらう。……かかる任務を立て、且つこれを系統的に遂行することなしには、唯物論は、的唯物論ではあり得ない。……このことなしには大自然科學者達は、今までと同様に屢々、自己の哲學上の結論や概括において無力であらう。蓋し自然科学は急速に進歩し、すべての領域において變革的崩壞の時代を経験しつつあるので、自然科学は如何なる場合にも哲學的結論なしには濟まされないからである」。

以上紹介したレーニンの「哲學的遺言」は、これを一言でいへば、ブルジョア・インテ

リゲンチヤの進歩的部分との提携において哲學的觀念論並びに宗教に對する系統的な批判を、自然科学の現代的問題と社會生活のアクチュアルな課題への適用を通しての辯證法の研鑽——ヘーゲル辯證法の唯物論的改作、唯物辯證法、辯證法的唯物論の展開——といふ見地から遂行しなければならぬ、と主張してゐるものである。

ソヴェート聯邦においては、レーニンの死後、このやうな「遺言」が實行され始めたのは、マルクス主義哲學におけるレーニンの段階、哲學におけるレーニニズムの本質、内容、意義が理解され始め、レーニンのパルタイリツヒカイトの見地から哲學が社會生活並びに自然科学のアクチュアルな問題の解明と密接に結びつけられ、觀念論的および宗教的世界觀やそれへの妥協主義に對する無慈悲な批判が開始されてからである。即ちそれは、大體において一九三〇年頃からであると云へよう。そして哲學活動の方針がこのやうな軌道の上に置かれるためには、一時支配的な地位を占めてゐたデボーリン派グループのメンシエヴィズム化しつつある觀念論を暴露し、同時にこの後者によつて克服されずに残され、主



要危険性としての右翼的傾向の理論的基礎となつてゐた機械論を徹底的に克服することが必要であつた。現在でもこの二つの戦線上の闘争は、大部分のデボーリン主義者や機械論者の自己批判にも拘はらず、依然として辯證法的唯物論の前進のための不可欠な條件である。哲學活動のこのやうな方向轉換、レーニンの哲學の正しい理解に基く哲學活動の再建において、レーニズムのための最大の闘士スターリンが直接間接に演じた指導的役割は重要である。また一般にスターリンによる唯物辯證法の法則や範疇の、社會發展の認識への適用による一層の具體化、發展も、辯證法的唯物論の前進のために研究されなければならないものである。

資本主義諸國においても辯證法的唯物論の前進は、觀念論的および宗教的世界觀（これがここでは批判の主要な対象である）や形而上學的唯物論に對抗して、最新自然科学の理論的問題および社會生活の諸問題の吟味に結びつけて、それを研鑽してゆくことを外には不可能である。

そしてその場合、レーニンが、マルクスやエンゲルスが辯證法を如何に適用し、如何にヘーゲル辯證法を是正したかといふ實例に依據して辯證法を究明せよ、と云つたとすれば、現代においてはマルクスおよびエンゲルスになほレーニンとその後繼者スターリンの名を附け加へなければならぬ。



唯物論全書

昭和十年十月十五日印刷  
昭和十年十月二十日發行

豫約頒價金八十錢  
二册金一圓六十錢

10.10.16

現代唯物論

著者 永田 廣志

發行者 竹內 富子  
東京市神田區神保町三ノ六

印刷者 堀内 文治郎  
東京市神田三崎町二ノ二三

發行所 三笠書房

東京市神田區神保町三ノ六  
電話九段四〇一三番  
振替東京二二〇九六番



唯物論全書刊行の辭

三笠書房

唯物論の生ひ立ちにはわが國に於ても未だ日が淺く、否、眞の唯物論の歴史はヨーロッパに於てさへ百年足らずの過去を有するに過ぎない。然し唯物論は今日すでに世界の驚異的存在となつてゐる。

ソヴェート聯邦は例外とするも、唯物論のために氣を吐いてゐる自然科学者・哲學者・技術家・社會科學者・さては文學者・評論家がフランス、イギリス、アメリカの優れた知能分子の内から續出しつつある情勢は、これを看過することが出来ない。

正に唯物論は歴史を正しい方向へ轉ぜんとする時代の鍵である。

然るに現在に至るも尙、日本に「唯物論の綜合的體系」が樹立されて居ない状態に思ひを致せば、單に遺憾などと云ふ言葉を以てしては到底表現し盡せぬものがある。

われわれは、この現状に鑑み、日本に於ける文化的水準向上の先驅を努め、併せて國民の科學的見識の達成に寄與すべく、「唯物論の綜合的體系」を樹立せんと卒先して計畫し、ここに「唯物論全書」全十八卷の刊行を企てた次第である。

新鮮なる思想と潑刺たる科學の殿堂は、われわれのこの計畫によつて初めて築かれると信ずるものである。

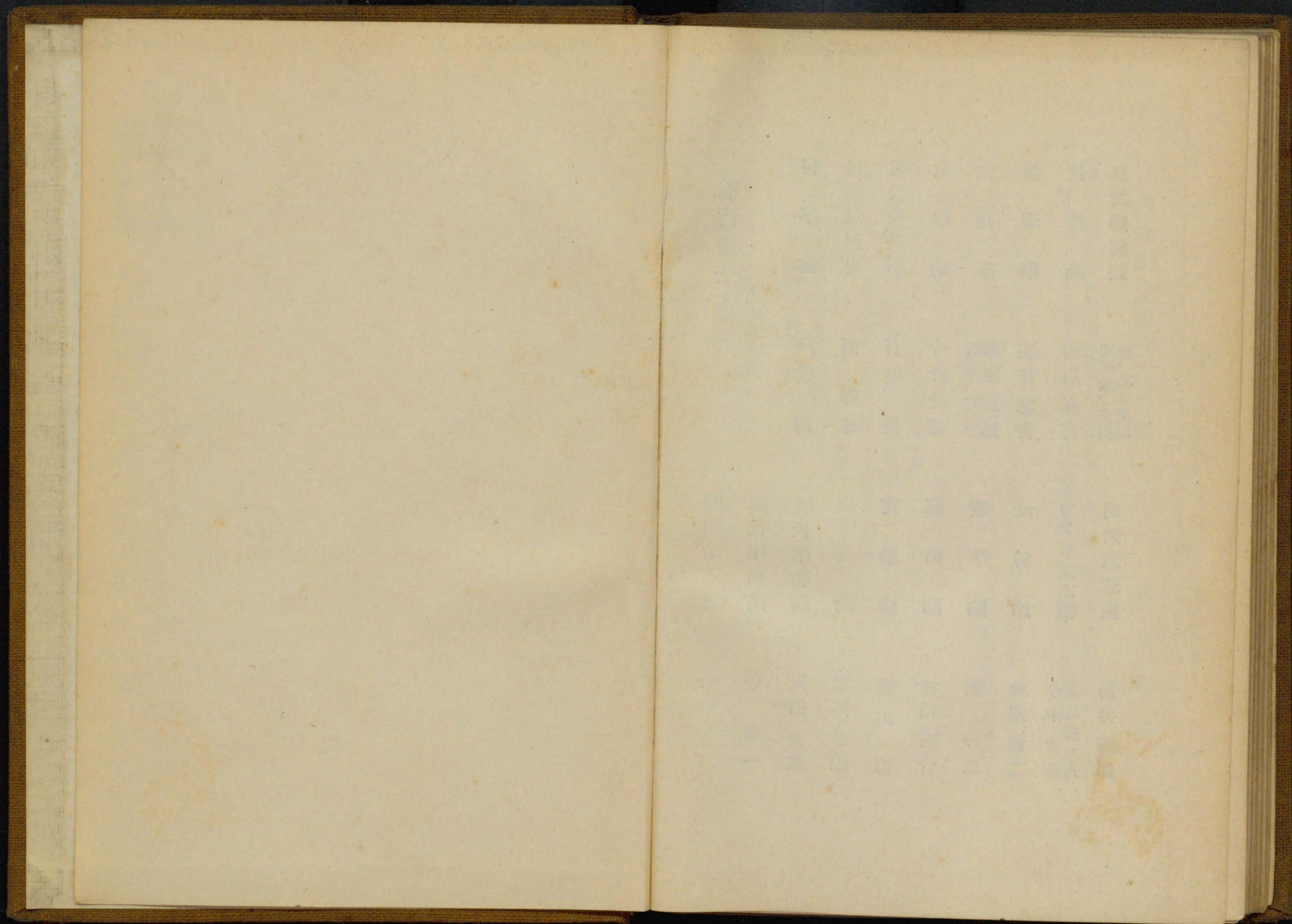
本全書の内容は現在最も根本的意義ある問題を網羅し、筆者は大家新進を通じての精銳を選りすぐり各自その専門的蘊蓄を傾注してこれを擔當して戴くことにした。讀者諸君の絶大な御賛助と御講讀を懇願する次第である。

唯物論全書

(太字は既刊書)

科學論	戸坂潤	現代唯物論	松原宏二
科學思想史	岡邦雄	近代唯物論	森宏一
現代物理學	石原純	歴史論	永田廣志
數學論	今野武雄	文學論	服部之總
生物學	石井友幸	藝術論	森山啓
論理學	石原辰郎	戰爭論	甘粕石介
技術論	三枝博音	無神論	堀伸二
自然辯證法	相川春喜	ファシズム論	秋澤修二
	岡邦雄、吉田	明治思想史	今中次麿
	斂、石原辰郎		具島兼三郎
			鳥井博郎

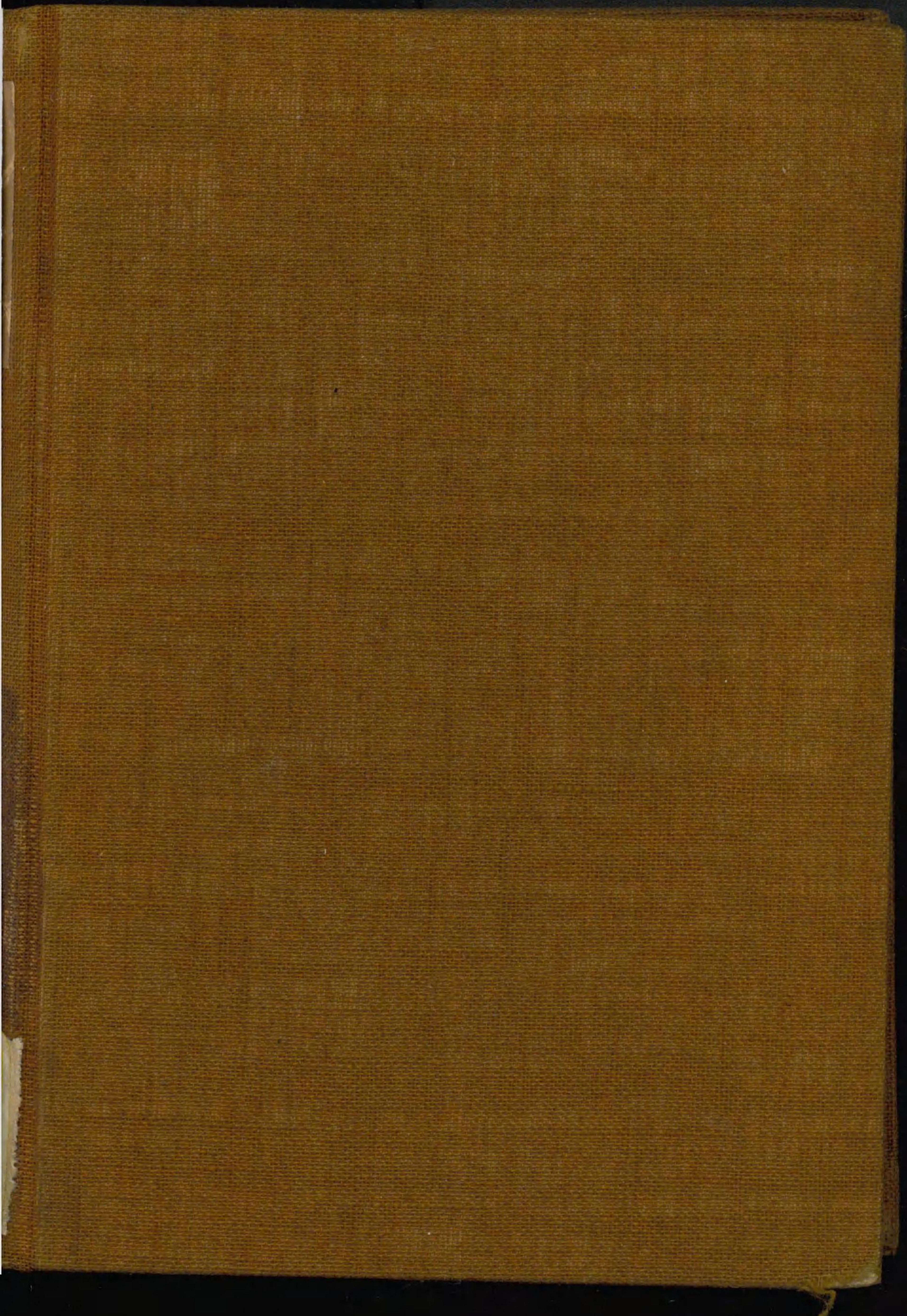






646  
6





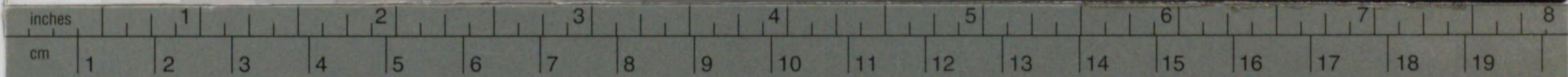


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

